第3表　県内多量銭貨出土地・遺跡

No	出土地・遺跡	出土枚数	銭　　種(内訳)	出土状態・他	文　献
1	邑楽郡邑楽町中野植生	17,991	開元、淳化、咸平、景徳、祥符、天聖等	壺の中　70kg	文献3
2	邑楽郡邑楽町中野前原3680	約1,500	北宋、唐、明銭約50種	天目、青磁伴出	文献3
3	安中市原市久昌寺西	約10,000	宋銭	宅　造	文献3
4	藤岡市上戸塚柿木142-6	約1,600	開元、至元、永樂、洪武(宋、唐、明銭)	道路工事	文献3
5	碓氷郡松井田町小日向	235	景元、政和、至元、皇宋、慶元、祥符他		文献3
6	利根郡新治村羽場	約23,400	永樂、皇宋、洪武、熙寧、元祐、祥符他	樽の中	文献3
7	新田郡尾島町大館	約2,300	永樂他　9kg		文献3
8	新田郡新田町花香塚	1,255	永楽、洪武、開元、皇宋、元豊、熙寧他		文献3
9	太田市牛沢	約23,000	富寿神寶～永樂通寶	カマス中	文献3
10	邑楽郡大泉町満願寺	約10,000	散逸	常滑壺中	文献3
11	甘楽郡下仁田町上小坂	約10,000	宋銭	工事中	文献3
12	富岡市原386-1	16,650		県立歴史博物館	文献3
13	碓氷郡倉淵村水沼	49,215	95%北宋銭		文献3
14	高崎市(滝川)坂井	1,300	38種宋、明銭主(貨泉、開元、洪武多数)	上毛及び上毛人96	文献3・13
15	伊勢崎市茂呂町飯玉神社	20,000	開元	壺中.上毛及び上毛人50	文献3
16	高崎市下佐野遺跡	5,979	第1表参照	土坑埋納	文献4
17	藤岡市株木遺跡	1,575	第1表参照	甕埋納	文献5
18	勢多郡粕川村堤頭遺跡	883	第1表参照	緡縄状態で出土	文献6
19	勢多郡大胡町茂木	10,000	北宋銭中心	桶埋納	上毛新聞
20	新田郡新田町旧生品村	2,829	第1表参照		文献7
21	新田郡新田町木崎南ケ丘183-2	50	第1表参照	小壺(合子)埋納	文献7
22	新田郡新田町花香塚字西	1,290	第1表参照	箱に埋納か、緡縄	文献7
23	新田郡新田町市野井・本郷	3,970	第1表参照		文献7
24	前橋市青梨子町下東西遺跡	74	第1表参照	溝	文献8
25	北群馬郡子持村白井遺跡群(当遺跡)	447	第1表参照	ローム採掘坑	

参考文献

1．坂詰秀一編集「出土渡来銭」ニュー・サイエンス社　1986
2．三上隆三「渡来銭の社会史－おもしろ室町記－」中公新書862中央公論社　1987
3．群馬県教育委員会文化財保護課「教材群馬の文化財２－中世編－」群馬県教育委員会　1981
4．「下佐野遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989
5．「株木遺跡」藤岡市教育委員会　1984
6．「勢多郡粕川村『堤頭遺跡』出土の埋納銭について」『群馬文化』219　群馬県地域文化研究協議会　1989
7．新田町誌編纂室「新田町誌　－資料編(上)原始・古代・中世・近世－」第２巻　新田町誌刊行委員会、新田町　1987
8．「下東西遺跡」㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1987
9．澁澤敬三　神奈川大学日本常民文化研究所編「日本常民生活絵引」第２巻　株式会社平凡社　1984
10．「多摩ニュータウン遺跡　昭和58年度」㈶東京都埋蔵文化財センター　1984
11．「下右田遺跡第４次調査概報」山口県教育委員会　1980
12．「葛西城」葛西城址調査会　1983
13．関　亀齢「発掘せる支那の古銭に就て」『上毛及上毛人』第96号　上毛郷土史研究会　1925
14．栗原文蔵「埋められた銭」『季刊　考古学』39　雄山閣出版　1992

第４節　ローム採掘坑について

麻生　敏隆

本遺跡で検出されたローム採掘坑群は、第１層(暗褐色土層）を剥ぎ取った当初、第１層と第２層のFP(Hr-I)とが混在した状態で広い範囲に確認されたことから、新しい時期の撹乱と考えた。だが、掘削段階でFP(Hr-I)やFA(Hr-S)、その下層の淡色黒ボク土や黒ボク土、それにローム漸移層の各層がそれ

ぞれ帯状やブロック状で確認され、下位のローム層がほとんど認められない埋没土層の様子から、ロームを採掘することを目的とした採掘坑と判断した。

本遺跡の所在する白井地区は、現利根川の川床から３～４段目の段丘面に相当し、土地改良事業が終了した現状ではほぼ平坦な地形だが、この台地をほぼ南北にわたり発掘調査する鯉沢バイパス関連の各遺跡では、FP(Hr-I)を剥ぎ取ると現利根川に平行するような形での微高地と低地が幾筋にもわたって検出された。この低地部分は、離水する以前の利根川、もしくは流れ込む小河川の跡と考えられ、その部分にはロームの堆積がみられない。本遺跡でローム採掘坑が検出されたのは、白井南中道遺跡の３区から４区にかけてであり、現在の町道部分をも含めた旧地形のうえでの微高地部分である。このことから、利根川右岸に広がる段丘面内の微高地部分を選んで、堆積するロームを採掘したものと考えられる。この段丘面が利根川の川床でなくなる時期は、台地の基盤である礫層の上位に浅間山給源のAs－YPが堆積していることから、今から約13,000年前である。

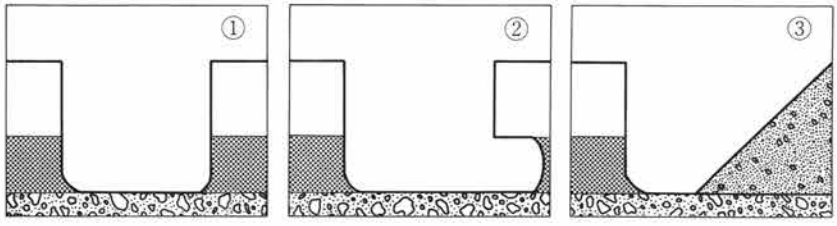
このように、ローム土の堆積も薄く、全体の量も僅かであるにもかかわらず、遺構が存在することは、ローム土そのものを多量に必要とする原因が遺構の周辺に確かにあったことを物語っている。従来の発掘調査で採掘坑が検出された事例では、縄文時代以後の土器類の生産に関して、原料としての粘土が採掘されるのが最も多い。また、登り窯などの構造物にローム土が利用される事例も一部に確認されている。一方、構造物を建造するための材料としてローム土などが利用される事例も認められる。一般には建物の壁として、あるいは城郭の土塁などの遮弊物として利用されることが最も多く、本遺跡でも、隣接する白井城や白井宿と通称される町並みの存在から考えて、このような利用も十分に考えられる。

掘削工程は、ローム土を効率的に採掘するために、ローム層の堆積が最も厚いと想定される部分にまず竪穴を掘削し、ローム漸移層の下部まで掘り上げたのちに、ローム土の採掘を行う作業を連続的に繰り返しすことを基本としているが、作業の能率を高めるために、ローム層部位での横掘りも実施している。また、ローム土よりも上位の土層を崩落させ、その土を用いて坂を作り出すことにより、ローム土の引き上げをも行っていることが想定されている。

ローム採掘坑群は、長さ約80m、幅約10mの広さ約800㎡にわたって、厚さ約20㎝のロームが採掘されており、その量は160㎥程である。個々の形態では、大小さまざまな形がみられるが、規模は長軸１～２m前後、短軸１m程度の楕円形のものが主体であり、確認できる深さは２～３m前後である。これらの採掘坑の分布範囲は、現在の村道の下に東側が潜り込んでいるために、正確な規模はつかめないものの、西側の低地部分側に達するに従って掘削の規模が小さくなり、停止してしまう様子から考えて、微高地の東西のロームが薄くなっていく部分で採掘を停止したものと考えられる。

周辺の遺跡では、僅か北に位置する白井大宮遺跡からは、ローム土が堆積していなかったために掘削作業を停止したと考えられる状態の土坑をも含めて３基検出されている。ここでも、微高地部分を選択して、掘削を実施していることが判明している。

遺構の年代については、採掘坑の底面から出土した土器や、採掘坑よりも年代的に新しいと考えられる備蓄銭が、永樂銭中心であることから、15～16世紀頃の遺構であると考えられる。



①地表からローム土上面まで掘削し、礫層上面までのローム土を掘り上げる。
②次に、ローム層部分を横掘りして掘り上げる。
③ローム層よりも上位の土層を崩落させ、それを用いて坂を作り出す。

第176図　ローム採掘坑の区分と掘削工程